

中学校へ入学したところから、南吉の文学への関心は高まっていたと見られ、二年生の時に交友会誌への投稿が記録されているほか、雑誌への投稿も少なくなかったことが、年表からうかがうことができる。中学校を卒業し、東京外語へ入学する間、しばらく、郷里の小学校で代用教員としたが、この時も創作を欠かさなかった。「ごんぎつね」は、その代用教員の時期、子どもに話して聞かせた作品の一つだという。

「ごんぎつね」は、一九三二年一月、雑誌「赤い鳥」に発表された。「赤い鳥」に発表されたのは、このほかに「正坊とクロ」三一年、「張紅倫」三二年、「のら犬」三二年の三編があり、それらの作品は、三重吉の補修をへて、それぞれ掲載されたといわれ、「ごんぎつね」にも鈴木三重吉の加筆がよくしられている。しかし、「新美南吉一七才の作品日記」に、原作である「権狐」が発表されている。「赤い鳥」の「ごん狐」とのちがいが比較できるのだが、そのちがいを三重吉の加筆と即断することはできない。南吉自身も「赤い鳥」投稿に際して、十分な手入れをしたものと想定できるし、彼自身、下原稿を清書する際に、かなりの推敲を加えるのが常であったからだ。だから、ここでは、三重吉の加筆についての詮索は考えないことにしたい。

とにかく、「ごんぎつね」は、読み手（聞き手）を学級の子どもたちとする立場で書かれた、南吉初期の代表作ととらえることができるが、作家の天性を感じさせられる。

「ごんぎつね」を「赤い鳥」に投稿してきた南吉の作品を初めて取りあげた与田準一の手であらすじにすると、次のようである。

ごんぎつねは、兵十のとった魚をびくのなかからつかみだして、川へ投げこみます。いたずらがしたくなったのだというのですが、その動作のなかみには作者の善意がこめられています。最後に、かみくだいたうなぎのことから、兵十のおつかあはうなぎがたべたいと思いつながら死んだのだろうと、ごんぎつねは考えます。そのつぐないとして、きつねは、いわし売りのいわしをぬすんで、兵十の家へなげこみます。兵十はそのためにぬすつとあつかいされて傷つけられます。きつねは、時分のやったことが、かえって兵十のためにはわざわざいとなったことのつぐないに、クリやマツタケを運びいれます。兵十は神様のしわざだと判断したことから、また、クリをもってきたきつねを火縄銃でころしてしまいます。ごんが死んでいく寸前に、兵十とごんのあいだの、はじめての理解流通がおこなわれます。

この作品は、まず、「これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いた話です。」というわくを示し、つづいて、「わたしたちの村の近くの中山というところ」という舞台が提示される。そして、「ごんぎつね」が紹介される。

「ごんは、ひとりぼっちの子ぎつねで」「いたずらばかりしました。」という冒頭部分の紹介は、読み手に「いたずらぎつね」という烙印づけになる。ごんといたずらとは抱き合わせになる。これは、この物語を展開する一つのモメントとなっているだろう。そして、あの兵十でさえ、最後の最後まで、「こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねが、またいたずらをしてきたな。」と思つたから、火縄銃でごんを撃ち殺してしまう、ということが、ごんの「いたずらぎつね」の観念を正当化する。兵十がいたずらぎつねめと思うには、それなりの個人的理由があるのだが、それをとらえないで、「ごん」いたずらぎつね」に振りまわされているのは、形象をとらえることは成功しない。指導にあたって、子どもたちが風評としてのごんと、描かれているごんとのちがいに、どんなに早く気づくことができるか、それに気づかせるかが大切なポイントとなるにちがいない。実は、「いたずらばかりしました」という紹介の前に、すでに「ひとりぼっちの子ぎつねで」とあるのだ。また、兵十のびくから魚をつかみだしたのは、「ちよつと、いたずらをしたくなった」のであって、いたずらではない。それは、子どもたちにもよくわかる。正確な読みとその指導は、文章・場面の映像化感情化によって、「いたずらぎつね」というごんの烙印づけから、どれだけ早く解放されるかで判断できるといってもよい。

この作品には、もうひとつのおとし穴がある。「ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いま

した。」という文が示す「つぐない」への傾斜だ。「まず一つ」ということから、二つめ、三つめとつぐないが続いていく、という方向性がとらえられるのは当然のことだ。だが、いうまでもないことだが、兵十が物置でなわをなっている時、ごんは見つかってしまうのだが、その時もっていったくりは、けっしてつぐないではない。ここまでくると、子どもたちも、つぐないとは思わない。では、いつからつぐないでなくなったのか。この把握も、子どもたちの読みの力と教師の指導の力を判定することができるような、おもしろいしくみになっている。正確な映像化、感情化の仕事は、つぐないという観念から読み手を解き放す。

これらの点は、「読み方指導」の視点から見た作品のすじの特徴といえることができる。子どもたち読み手は、作品の展開に従って、しだいにごんの気持ちに同化されていくから、「兵十のかげぼうしを、ふみふみきました」というお場面までくると、自然と「兵十といっしょにいたいんだ」とか「ごんは兵十が本当に好きなんだ」とかの発表がでてくるようになる。この段階では、ごんは、もういたずらぎつねでもなく、ごんの行動はつぐないの行動ではないことがはっきりしてくる。そして、その「おこり」は、兵十のおっかあの死と、自分のいたずらとを主観的に関係づけて、「ちよっ、あんないたずらをしなければよかった。」と、穴の中で考えたことにある。そう考えた必然性は弱いかもしれない。だが、ごんのこの考えは、兵十に通ずることはなく、「やまば」の破局の場面を迎えることになる。そして、兵十の生活のひとつひとつを知り、共感し同情しているごん（読み手）とは対照的に、ぬすつとぎつねとして追いかけた時から、鉄砲で撃つまでの間、一回もごんについて知ることのなかった兵十であることに気づかされる。破局は、必然的だ。すじとして、この作品のような特徴をもっている。

場面の中に、豊かな自然と風土が描かれている。それは、たいそう一般的で、特にむずかしくはないのだが、次の二点で興味をひく。

その第一は、南吉の生まれ育った岩滑新田を含む知多半島、広くいえば尾張、三河の風土の特徴を強く反映している部分だ。例えば、「兵十が赤い井戸のところへ、麦をといでいました。」の「赤い井戸」とは、常滑焼きの赭赤色の土管で作られた質素な井戸、井戸囲であるという。「牛をつなだい樁の木」は、海蔵さんが井戸を掘る話だが、「井戸新さんは、人足がいくらいくら、井戸囲の土管がいくらいくら、土管のつぎめを産めてるセメントが・・・」と、ここでも、土管が井戸囲に用いられていることがわかる。その井戸囲の土管は、きっと、赤い色の常滑焼きだったのだろう。兵十は、そんな井戸で麦をといでいたのだ。

また、月のいい晩、ごんは、ぶらぶら出かけて、兵十と出会うのだが、兵十たちは「お念仏」に行ってしまう。中世以降、尾張・三河は念仏信仰の栄えたところで、近世にはいと、岩滑に近い成岩の常楽寺が徳川氏の庇護のもとで権勢を誇っていたというし、善光寺如来に対する庶民信仰の厚い地域だという。宗教的行事は、農耕儀礼のための宗教儀礼とよく結びついて発展するものであるが、南吉自身も、こういった村の行事に関心をもっていたから、さりげなく、「お念仏があるんだな」となるのだが、これも、彼の生地の風土を反映したものといえる。

その第二は、いかにも鮮やかな自然描写が随所に散りばめられている。たとえば、「空はからつと晴れていて、もずの声がきんきんひびいていました。」「あたりのすすきのほには、まだ雨のしずくが光っていました。」「および、それに続く風景描写。」「いいお天気で、遠くむこうには、お城の屋根がわらが光っています。墓地には、ひがん花が、赤い布のようにさきつづいていました。」「人々が通ったあとには、ひがん花がふみおられていました。」などの描写。

その情景を映像化することは、容易だといってよい。しかし、作品の形象の中、構造の中に位置づけ、意味づけることは、かなりむずかしいことだし、また、それがうまく読み手に位置づかないでしまうという部分がある。これは、わたし達の研究・力量のまずしさであるかもしれないのだが。

「自然」の形象は、人間の生活・事件が進行する背景をなしていて、性格と情況との描写をたすけるばかりでなく、作品のもつ情緒的なひびきを強める。ごんぎつねの最初の部分は、自然の描写になっていて、そういうはたらきをもっている。（奥田靖雄・国語教育の理論）のだから、この点、さらに研究していかなくてはならない。

「南吉の描写した郷里の自然を作品から読みとる際に、目を凝らせば、いたるところに特有の風物が描かれている。それにもかかわらず、子ども的一般読者に、これが読解の妨げにならない（斉藤寿始子）」のだが、同時に、その自然の描写の中にこめられた情緒、それが担っている作品の理想の強化を構造的にとらえるのに、もってこいの教材であり、研究材料でもある。

この作品のなかで、もっとも印象的な場面は、言うまでもなく作品の最後の一行、「青いけむりが、まだ、つつぐちからほそく出ていました。」である。ここには、この作品の感情評価的な形象のすべてがあるといつていいし、ときには、全作品の形象を凝集しているという言い方もされる。

「人間をとりまく物の描写も、おなじような意味をもっているだろう。文学作品は、主人公の住む家、もちものや服装などをえがくわけだが、それは、おおくのばあい、その主人公の性格を特徴づける手段としてもちいられる。「ごんぎつね」の最後の部分には、火縄銃が描写されているが、この部分は、この作品の悲劇調をいちだんとつよめるはたらしきをしている（奥田靖雄）」のだが、どのように強められているのか、そして、強められているのは何なのかを実践的にたしかめるのに、もってこいの作品であると言えよう。

*この資料は、一九八五年に提示されたものだが、いまだに「ごんぎつね」の読みにおいては、最後まで、ごんの行為を「つぐない」として読み終わらせることが多いようだ。ここに書かれているように、文をていねいに読み、描写をていねいに映像化していくと、途中から「つぐない」ではなくなることがわかるはずなのだが。案外、指導者側が「つぐない」にこだわり、読み手の子どもたちは、「ごんは、兵十のことが好きなんだ」という気持ちで読んでいるのかもしれない。

さらに、あの頃も、学校を巡る状況には厳しいものがあり、「いじめ自殺」問題も社会問題化されていた。それが、さらに深刻化して、今日に至っている。「ごんぎつね」という作品は、そういった問題に対して、小さな波紋を呼び起こしてくれそうな作品だ。ていねいに読み、ごんや兵十の気持ちに感情評価をつかむことができるならば、一方的な思いがもたらす誤解や、人の一面性しか見ないことによる悲劇は、現代的な課題としても重要だと思える。それらを、形象として、つまり感性的に知覚することが、子どもたちに新たな成長をうながす機会になることができる作品だと言える。

二〇〇七年 蛇足